

優秀賞

考え方を変え、個性へ

吉見町立北小学校 6年

長峰 朱里

私は、今まで障害者と聞くと障害があるからみんなとちがって可哀想という決めつけをしてしまっていた。しかし、福祉の授業やボランティアから知った事でイメージが変わった。特に福祉の授業の身体に障害がある方の話が心に残っている。

私は、授業で車イスを使っている方とふれあったことがある。その方は、病気になって車イスに乗り始めたと言っていた。大人になってから車イスに乗り、最初は何をしたらどう進むのかどのように日常生活を送ればよいのか分からなかったそうだ。でも、日常生活のためにどのようにしたらよいかを考え、工夫をしたそうだ。例えば、料理を車イスに乗ったままできるように車イスが当たってしまう場所をなくす。洗たく物を干すのに高さが足りなかったら、自分で棒を作り洗たく物が干せるようにするなどだ。でも、私はまだこれで車イスを使っている方は本当に幸せなのか、不幸と思っているのではないかと思った。車イスを使っている方にその疑問を聞いてみた。すると、その方は、

「確かにはじめの頃は辛かったけど、自分で工夫をしたりすればいいし、公共の場では、自分たちのために手伝ってくれる人や設備があるからすごく幸せ。今は、幸せという言葉の方が大きい。」と言っていた。私は、その言葉から障害だから辛いのではなく、障害があっても工夫をする、自分の行動でその考えや感じ方が変わるのを学んだ。

また、ボランティアでは、身体障害以外の知的障害を持つ方とふれ合った。最初は、知的障害＝脳の機能がおくれているからふれあいづらいのでは？と思っていた。でも、その方達と体を動かして遊んでいるとできない部分があっても補助をしてもらって一緒にやったり、そのやっている事をよく見て解説をつけてくれる方もいた。私は、その方達と遊んでいるうちにもっと関わりたい、すてきな個性だなと思った。そこで私は、障害とはその人自身の一つの個性なのだ、と思った。私達のように障害がない人とはちがうけれど、それぞれ工夫をこなし長所を伸ばして同じように過ごすことができる。これからは、障害者だからと固定がい念にしばられず、それぞれを大切な個性として認めあえる社会になるよう私にできることから取り組みたい。